

ソ同盟科學院經濟學研究所著  
マルクス・レーニン主義普及協會譯

## 『經濟學教科書』 第一分冊の第一篇、即ち 歴史に關する部分についての感想

増 田 四 郎

私に課された仕事は、この書物の第1篇、「資本主義以前の生産方法」という部門をよんで、歴史を學んでいるものとしてどういふ所感を抱くかということ、出来るだけ卒直にのべてみることである。正直にいつて、私は最初このすぐれた邦譯を一讀した際、非常に興味深く一擧によむことが出来た。それは従來公刊されているマルクス主義についてのどの類書よりも、たやすく、解りやすく平易にするされていたからである。しかしこの簡明な敘述を、歴史または經濟史の敘述としてよみなおしてみた場合、私は多少落膽せざるを得なかつた。なぜかといえば、これはあまりにも自明のこととして圖式を前提しており、歴史をきりひらいて來た苦しくも多様なジグザグの道程やそこに生きていた民衆の在り方、各地域のもつ歴史的條件の相違等々について、何ら歴史家としての問題提起をふくんでいないからである。原始共同體の太古の時代からブルジョア革命までの幾千年の人類の歴史を、わずか100頁あまりにまとめたものであるから、このような要求をする方が無理であるが、それにしても一つの時代乃至生産方法がつぎの生産方法に移行する轉換期の在り方について、もっと具體的な敘述を理論的なものにむすびつけて論じてほしいと思う。

しかしこのような不満は、實は歴史の敘述としてこれを読んだからであつて、資本主義及び社會主義の生産方法を詳細に分析敘述することを目的としている經濟學の教科書であることに思ひをいたすならば、わずか100頁の歴史的敘述は、實は歴史ではなしに、文字通り「資本主義以前の生産方法」の概要を誰にでもわかるように綜括すれば足りるわけである。こう考えた私は、いわば的なきに矢をはなつことを自覺した氣樂さを感じるると同時に、ソヴェトをはじめマルクス主義に立つすぐれた歴史家殊に經濟史家の詳細な個別研究が、このような概括とどう結びつくのかということに、特殊の興味を感じざるを得ないのである。換言すれば、人類の社會經濟の發展というもの、結局はこの教科書の綜括のような圖式となることを證明することが經濟史家の目標なのか、それとも多難にして多様な挫折と成功、變革と停滯、環境と

條件等を分析するあいだから、具體的な場における具體的なトレーガーの在り方を知り、その各々の歴史的意義を見定めることが目標なのか問題なのである。もし後者の立場をとるとするならば、圖式を前提としつつも、なおかつ史實に對する歴史的理解の深みが、多様に即して會得されるわけで、そうした深さと幅のある理解の集積は、やがては圖式によるものごとの割切り方、ひいては圖式そのものの理解の仕方によつたかな肉づけをもたらすであらう。そうでなければ E. A. Kosminsky が最近イギリス農業史に關する論集を發表したり、W. I. Awdijew の『古代オリエント史』、N. A. Maschkin の『ローマ史』、W. F. Semjonow の『中世史』の如きそれぞれ660頁、778頁、442頁といった大著、或いはビザンツ史、東歐史についてのきわめて實證的な個別研究等が、ソヴェト學界から續出する盛況の眞義を理解することは困難であらう。

このように考えて來ると、本書の歴史的な敘述の部分は、あまりにもあっさり問題と割切りすぎており、すくなくとも歴史的には、數限りなく疑問が提出される。その一々についてここに述べるいとまはないが大ざっぱな所感としては、つぎのことだけははっきりといえるのではなからうか。即ちこの敘述は、今日のすぐれた學者の協力によつて編纂されたものであるため、インテレクチュアルに整理された基本的な知識がきわめてみごとに明確に綜括されているが、それだけにいわばなまの史料や史實から理論をつくり出そうとする場合の論者のオリジナルな苦勞がにじみ出していない。讀破に非常に困難なマルクスの諸著、殊に歴史についてはあの『資本制生産に先行する諸形態』とか、エンゲルスの『ドイツ農民戰爭』とか、レーニンの『ロシアにおける資本主義の發展』等をよんだ時のあの一種いいよのない力強さの感じは、この書物からは残念ながらうけとられ難い。同じ實踐的な意欲にささえられているとはいへども、何かそこに質的にちがったものを感得せざるを得ないのは、私のよみ方がいけないからなのであらうか。このことの一端をしめすために、いまずこしく内容的に、私自身多少

とも調べている問題を中心として、本書の敘述についての疑問の若干をうちあげてみたい。いうまでもなくそれは本書の歴史的敘述だけに限った所感であり、しかも歴史研究者の立場からの感想であることを、重ねてここにおことわりして置かなければならない。

まず大きな問題の一つは、古代より中世への轉換即ち奴隸制より封建制への移行を考える場合と、封建制より資本制への移行を考える場合における歴史的発展のトレーガーをどう理解しているかという點である。即ちギリシア・ローマの古典古代世界が没落するということと、ローマン・ゲルマン世界またはビザンツ世界が成立するということとのあいだには、生産方法からみた発展の段階が考えられるにしても、歴史の民族的な擔い手という觀點からすれば決して連続的・同質的であったとは認め難い。だからこそ、民族大移動期以前のゲルマンやスラヴ、ケルト等諸族の社會構造が大きな問題となつて来る。ローマ末期社會の封建制への傾斜は、奴隸の叛亂、ゴロスの制度、蠻族の侵入という現象によつて説明されるが、眞の封建化の過程がおしすすめられるためには、ゲルマン民族に古くから存在したマルク共同體の崩壞、即ち獨立小農民の廣範な層が農奴化される時期を待たねばならなかつた。しかもこのことがヨーロッパでなしとげられたのは、5,6世紀から9,10世紀という500年にも及ぶ時期のことであり、これをさらに「奴隸所有者に對する奴隸のたたかひの歴史のもっともかがやかしいページ」といわれるB.C. 74—71年のスパルタクスの指導した蜂起より數えれば、實に1000年に及ぶ過渡期となるわけである(譯書 p. 55, 67)。この長い間の各地におこる雑多な事象をば、一つの觀點から一つの理論への意味づけとして統一的にとらえることは、理論的に可能であるにしても、歴史的に、具體的社會との關連においてどうわれわれが理解してよいのであろうか。つまり一つの社會に内在的に發生する矛盾ということのほか、他民族との接觸、融合、反抗等がかもしだす叛亂・變質・發展がきわめて多いのであつて、實踐的にはむしろそのことの理解が大切だといふ事例もすくなくない。例えばアフリカにおける“Circumcellion”と呼ばれる下層民の叛亂は、ローマ支配以前から根強く底流をなしていた先住民の民族感情とドナティストの宗教運動を考慮することなしに、單に經濟的にのみとらえることは困難であり、ガリアのバガウデン(Bagauden)の反抗にしても、ゲルマン民族移動によるガロ・ローマン社會の變動を無視してその本質を理解することはむずかしいであろう。それゆへ古代末期より中世にかけての變革過程については、マルクス主義史學の側でも論争多く、なお未解決の

點がきわめて多い。

ところが中世より近世へ、即ち封建制の崩壞過程の問題は、一應「ヨーロッパ」というまとまりのある世界における同じ歴史の擔い手による社會の必然的變革としてとらえられる。封建制度の内部における資本主義生産の芽ばえ、並びに資本の原始的蓄積、農民からの強制的な土地收奪等として綜括されている部分がそれである(p. 85—88)。即ちこの場合には、ゲルマンやスラヴの移動・侵入の如き異民族社會の問題は存在せず、いわば自己轉換の結果としてブルジョア革命に突入するのである。しかも封建制崩壞への前兆は14世紀におけるジャクリーやイギリスの農民一揆にみられると考えられ、同じ系列において16世紀ドイツの農民戦争、17—19世紀ロシアの農民蜂起、さらには中國の太平天國の亂さえも同性格のものとして規定せられている。そして今日では、こうした考え方は一種の常識とさえなっている。はたして歴史的にみてそういえるのであろうか。われわれはさきにのべた封建制成立の長い過渡期とその地域的な特殊性を一方に考え、他方封建制崩壞の先驅的現象が勃發する地域と時代とを想う時、いま一度この常識に對して深い反省を加えなければならぬ。

つぎに問題なのは、封建制崩壞の眞の原因を何にもとめるかという點である。本書の敘述では商業資本の役割がまずとりあげられ、それが資本主義的企業である手工制工場(=マニュファクチュア)の發生をたすけたと説き、商品生産の發展が封建的分裂の政情をこえて國民的市場を形成し、ひいては絶對王政を促進せしめたとなし、世界貿易と世界市場の發生にもなつて大きな資本主義的經營をうみだしたと述べている。そして買占商人が産業資本家になつてゆく過程をかなり重視しているのであるが、農民層の分解についても、農村自體の内部に寄生的な富農があらわれることを決して看過しているわけではない。従つて小商品生産者——手工業者と農民——が階層分化することによつて資本主義的企業家がそのあいだからうみだされるということと、商人に代表される商業資本が直接に生産を自分に從屬させて資本制生産がもたらされるということ、並びに世界市場の形成という外からの新しい條件のいずれが最も本質的な要件とみなされているのであろうかが必ずしも明瞭ではない。例のドップ對スウィーザーの論争や大塚史學の問題というものは、この述敘に照してどう判斷されればよいのであろうか。「中世には、大きな貨幣財産を、商人と高利貸が蓄積していた。その後これらの富は、多くの資本主義的企業を組織するための基礎になつた」(p. 94)と説かれるのを見ては、わが國の學界での論議とどう焦點をあわせ

るべきであろうか。この點をもっと突込んだ分析で述べてもらわぬ限り、轉換期の構造分析を通じて実践的な要請に参加しようとするわれわれは、何か平凡な常識論で肩すかしをくらわされたような不満を禁じ得ない。蓋しこの點に關し、一本筋の通った分析を實證的に、理論的になしとげることが、今日わが國の社會經濟史學における最もアージュントな課題だからである。

つぎに問題となる大きな疑問は、例えば封建制度の時代的なひろがりについて各國・各民族にかなり大きな差違のあることが指摘されているが (p. 64 以下)、そのような差違の生ずる理由について、どう説明されるのであろうかということである。歴史學の側からいえば、或る國では早く封建制が消滅し、他の國では 19 世紀までもそれが残っていたという場合、それがどのような様相の相違をしめしたかということと同時に、何ゆえにそうした遲速の差をまねいたかを分析しなければならない。そうでなければ、実践的な意欲をいくら強烈にもっていても、情況判斷についての誤差が生ずるわけで、意欲を妥當せしめる場が見つからないはずである。このことについて、本書は折角各國の差違を指摘しながら、ほとんどその理由を説明してくれない。かつてソヴェトでこの問題がはげしい論争を惹起した消息については、われわれはあのドイツ譯された大著 *Zur Periodisierung des Feudalismus und Kapitalismus in der geschichtlichen Entwicklung der UdSSR., Diskussionsbeiträge*. Berlin 1952. を通じ、そのあらましをうかがうことが出来る。同じような問題は資本主義と社會主義の關係についても存在するであろう。現に中國におこなわれている社會經濟の激變は、理論とならんで、中國の歴史的環境を無視して理解することは出来ない。すくなくとも歴史的には、その理論の妥當する場を正確に見定めなければ、現實から浮きあがった理論となる危険がある。封建的な遺制が身近かに感ぜられるわれわれにとっては、理論と歴史を結びつけようと努力することが最も大切なのではなからうか。

以上のことに關して最後に私は、つぎのように非常にナイーヴな疑問を抱かざる得ない。それは本書にほとんど自明のこととして前提されている社會經濟史上の諸概念、例えば「民族」、「マルク」、「村落共同體」、「奴隸制」、「農奴」、「封建制」、「家長制」、「ギルド」、「封建的大土地所有」(ゲルトヘルシャフト)、「マニユファクチュア」(譯書では手工工場とされている)等々の内容が、歴史的事實としての根本史料との關連において、どう理解されているのだろうかという問題である。というわけは、周知の如く、これらの概念はおおむね 18, 19 世

紀の西ヨーロッパの學界がつくり出したものなのであって、今日ではその内容規定について多くの疑問が提起されている。「民族」や「マルク」をとってみても、内容は史料的にはおそろしく多様であり、その實體をつかむことは容易ならぬ仕事である。「村落共同體」にしても、ドイツ語の Genossenschaft, Gemeinde, Nachbarschaft, Korporation 等々のどれが適確なのかさえ簡単ではない。ましてヴィリカツィオン制または古典莊園が行われた際の村落と、それが解體する過程の村落、乃至は 16 世紀以降の村落とでは、西ヨーロッパだけをとりても、經濟機構の性質は非常にことなっている。「農奴」と綜括される農民の實體や、「ギルド」の内容にいたっては、さらに複雑であり、その複雑さが實は社會變革の推進に色々の結果をもたらしていることがわかる。そして今日の實證史學においては、西ヨーロッパ自體が、これら 18, 19 世紀の諸概念への再吟味を遂行しつつあるのである。ましてや西ヨーロッパとことなつた歴史的傳統をもつわれわれ東洋の諸事象が、これらの諸概念をもつて完全に割切りうるものであろうか。そのことの吟味がきわめて大切なのである。勿論こういふからといって、われわれは東洋は東洋だ、日本は日本固有の社會だなどと主張しようというのでは毛頭ない。むしろ逆であつて、18, 19 世紀西ヨーロッパの諸概念の内容を一層史料に即して正確にし、それによって人類の經濟發展をどう綜括出来るかを、部分的にも自分に納得のいくかたちで再吟味してみたいのである。だから或る思想なり體系なりが、史實に合致しているかまちがっているかを檢證することが目的のではなく、諸概念の内容を史實との關係でより適確なものに昂めてゆきたいのである。つまり歴史研究という學問的操作を通じて、内容的な理解とともに實踐に參與したいのである。従つてそんな古い時代のことを、それほど面倒な操作によつて再吟味しなくとも、實踐の世界がひらけていると考える人には、實證史學の苦心というものは、さほど興味をひかないであろう。にもかかわらず、歴史研究である限り、われわれはこれをつづけなければならない。マルクス主義に立つ歴史家も、それが歴史研究である限り、この面倒な操作をつづけており、コスミンスキー・キギリスのヒルトンなどの研究は、十分に實證史學の本流をくむものである。

いまほんの 1 例として「領土制」と呼ばれるものの實際を考えてみよう。例えばここに修道院があつて多くの分散所領をもち、その所領が幾人かの世俗諸侯を代官 (Vogt) としている場合、農民に對する具體的な支配は、その村に古くから自生的に存在した下級家族がマイエル (莊司) となつて實施していることが屢々あり、従つて

Maier または Maierhof が聚落秩序のいわば自生的中核をなしていることもきわめて多い。このような場合、領主の支配権というものは、如何に作用するのであろうか。經濟外的な強制といっても、修道院とフォークトとマイエルのいずれが如何なる權力を行使し、また村落共同体はどう運営されるのであろうか。一つの村落の土地が、敘上の支配關係の系列以外の領主によって占められ、混在している場合も多いのであるが、その時には村落團體の運営は一層複雑となる。またもしその所領が、農民によって村落を形成せず、各個のばらばらな定住形態 (Einzelhof) をとる時には、一體領主對農民、農民相互の關係、地地形態等はどうなるのであろうか。修道院、フォークトとしての世俗諸侯、マイエルの三者の中で、誰が高級及び下級裁判權をもつのであろうか。入會地の權利關係などになると、事態はさらに複雑となっている。

西ヨーロッパの一地方の莊園の一例だけをみてもこのように錯綜している。しかしその錯綜した糸のもつれを内容的に分析し、理解するのでなければ、或る農民蜂起の眞義、その挫折や成功の理由、ひいては農民戦争などのうごきをつかめないのである。

まことに皮肉なことではあるが、歴史學の方からいえば、常識的に或る制度が古典的形態をとったといわれている時代のことが最もわかっていない。例えば奴隸制が古典的な形に圓熟した例といわれるラティフンディウムの実態や、封建的な古典的莊園の時代といわれる 10 世紀から 13 世紀までの農村のことが、實際には不明の點が多い。それらは多くは、その前の時代と、その後の時代との史料から推して、いわば知的に理想型を想定されている傾きがつよい。そして概念を自明化することによって、歴史的實態を掘り下げることを回避せしめる作用をおよぼしている場合が多い。歴史研究においては、理論的理解に急なあまり、約束づきの概念で主張をすること

はつつしまなければならぬ。これは非常に明白なことであるが、實行することはきわめて困難である。マルクス主義に立つ歴史家も、そうでない歴史家も、「事實關係の正しい認識」という目標に向ってこの困難な途をすすむならば、社會經濟史の體系化は一層ゆたかなみもりを結ぶことであろう。お互いが背をむけるのではなく、相互にその所論を理解しあうという研究の雰囲気が必要である。ソヴェト學界については東獨を通じてわずかにその事實を知りうるのみであるが、イギリスやフランスの社會經濟史學界には、若干そうした意味での注目すべき文獻・雑誌があらわれている。

以上はこの「經濟學教科書」の歴史的敘述をよんだ感想である。はじめにおことわりしたように、私は歴史觀としてのマルクス・レーニン主義を批判しようとしたのでもなければ、この「教科書」の全體を書評しようと考えたのでもない。むずかしい理論をおそろしく明解平易に啓蒙的に敘述された本書は、經濟學の理論の側から全面的な批評が下さるべきであって、「つけたり」の如き歴史部門は單なる概括でよいのであろう。しかしマルクス主義的な經濟史の研究は、周知の通りもっと困難なこまかい問題の分析をすすめており、また今後もその方向にすすむことであろう。従って本書の歴史の部分だけをよんで、これが社會經濟史であるなどと思ひこまぬよう注意しなければならない。理論的にはこれで充分なかも知れないが、歴史を介して實踐的にならうとするためには、もっと複雑な具體的社會の構造變革を分析なくてはならない。しかしそれでは理論と歴史とはどう結びつくべきであるのかという基本的な問題が出て來ることになるが、この大きな問題は、この「教科書」の感想文では到底のべつくせない。經濟學者であるモーリス・ドップの名著の如きが、それに對して好個の一解答をあたえてくれるであろう。(1955・V・1)